

交流及び共同学習の事例を探究する（3） ～学術的な視点に立った子どもの経験に基づく実践の開発～

企画者	中村晋（筑波大学附属大塚特別支援学校） 楠見友輔（東京大学大学院教育学研究科）
司会者	中村晋（筑波大学附属大塚特別支援学校）
話題提供者	細谷一博（北海道教育大学教育学部） 李熙馥（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所） 楠見友輔（東京大学大学院教育学研究科）
指定討論者	齊藤由美子（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）

KEY WORDS: 交流及び共同学習 子ども経験 開発

【企画趣旨】

本自主シンポジウムは、わが国の交流及び共同学習の実践に関する具体的提案を通して、今後の実践の開発に向けての示唆を得ることを目的とする。

障害のある人となない人が支え合って生きることができる共生社会の実現のためには、学校教育における交流及び共同学習は重要な実践である。しかし、障害生徒と健常生徒の交流は古くからその重要性が認められているにも拘らず、効果的な交流の条件や評価に関する議論はこれまで殆どなされていない（楠見, 2016）。

企画者らは本学会大会において、これまでも同メインタイトルの自主シンポジウムを実施してきた。そこでは、子どもの学習目標に基づく実践の計画と実施を行い、具体的に客観的な評価を行うことによって交流及び共同学習を教育実践の一環として位置づけるための筋道を探ってきた。前回大会では、子どもの運動能力、社会性、自己理解等の多様な評価観点を設定し、それをエピソード分析、質問紙調査、行動分析、インタビュー等の方法で評価するという、多様な観点と方法を用いて子どもの経験を評価することの重要性を示した。しかし、前回の反省点として、子どもの経験を評価した上での今後の交流実践やわが国の交流及び共同学習の実践の開発に対する提案を行うところまで議論を進展させることができなかつたことが挙げられる。

交流及び共同学習は多様な形式・内容・構造を含む用語であり、万能薬的な実践や評価の方法があるわけではない。だからこそ、学術的な視点に立つ活発な議論を展開することによって、交流及び共同学習をコントロール可能なテーマとすることが重要であると考え。本年度のシンポジウムの話題提供者は、子どもの経験という観点から障害児と健常児が同じ場で学習や活動をすることの意義について検討してきた研究者である。話題提供では、3名の研究者が、これまでの自身の研究から得られた知見を紹介し、今後の交流及び共同学習の方向性に関する具体的な提案を行う。指定討論では、それらの提案の可能性や限界、今後の交流及び共同学習の実践や研究のあり方を探っていきたいと考えている。

【話題提供の趣旨】

1. 子どもの自己決定を尊重した交流及び共同学習の提案
担当：細谷一博

筆者はこれまで小学校の知的障害特別支援学級に在籍する児童の交流及び共同学習について、実態調査や特別支援学級児童にとっての効果等について研究を行ってきた。特別支援学級に在籍する知的障害児が通常学級で交流活動を行う際には意欲的に取り組む必要があるが、その為の方法

論についてこれまで語られてこなかった。そこで本シンポジウムでは、特別支援学級に在籍する知的障害児の自己決定を尊重した交流及び共同学習の可能性について探っていきたいと考えている。

2. 自閉スペクトラム症児における自分の経験の振り返り
担当：李熙馥

本シンポジウムでは、自閉スペクトラム症（ASD）児がどのように自分の経験を振り返り、意味づけるか（ナラティブ）について典型発達（TD）児と比較検討した研究を中心に紹介する。TD 児は、家族や友達との経験について振り返る際、その経験が自分にとってどのような意味があったかについて言及したり、自分と他者との相互的な関係に注目した言及をしたりしていたが、ASD 児は自分の経験を意味づける言及が少なく、自分と他者との一方向的な関係に注目した言及をしていたこと等について報告する。交流及び共同学習の意味や成果を考える際に、子どもたちの振り返りが一つの観点となり得ることについて考えたい。

3. 障害児にとっての質の高い交流の条件とは何か
担当：楠見友輔

筆者はこれまで学校間交流を対象とした研究を行ってきた。方法としては、交流実践をビデオカメラで記録し、その記録映像を参加者に見せながら交流時の経験を聞くという再生刺激法インタビューを用いており、対象は知的障害特別支援学校と通常学校の交流に参加した知的障害生徒と健常生徒、視覚障害特別支援学校と通常学校の交流に参加した視覚障害生徒と晴眼生徒に渡る。筆者はこれまで効果的な交流の条件の解明を目指してきた。本シンポジウムでは、筆者の最近の研究をもとに、知的障害生徒にとっての効果的な交流の条件について探っていきたいと考えている。

【指定討論者の趣旨】

すべての子どもの主体的学びあいを育む交流及び共同学習
担当：齊藤由美子

「交流及び共同学習」とは、相互の触れ合いを通じ豊かな人間性の育成を目的とする「交流の側面」と、教科等のねらいの達成を目的とする「共同学習の側面」が一体としてあることを表す言葉と説明される。子ども自身の声から、これらの目的にどのように迫れているのかを検証することは意義深い。今後は、「すべての子どもの主体的な学びあいを育む」ことを前提とした理論モデルの構築が必要である。その上で、交流形式や子どもの状態・ニーズ等を考慮したゴール設定や、通常の学級側と特別支援学級（学校）側の役割の検討等、現場の実践構築に役立つ提案が望まれる。

(NAKAMURA Susumu, HOSOYA Kazuhiro, LEE Heebok, KUSUMI Yusuke, SAITO Yumiko)